
グラノラトフィーバー

あや/小町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラノラトフィーバー

【Nコード】

N1596I

【作者名】

あや／小町

【あらすじ】

『乙女たちだけの閉じられた庭で』

良家のわけあり子女が集まる全寮制の女学園には、手作りのお菓子に大切な思いを込めて贈るという習慣が息づいている。

放浪の画家の一人娘、晶と、学園創始者の血筋で財閥の跡取りでもある妃穂^{ひすい}。そして妃穂の幼なじみとして育ち従者を自認する茨木。

もつと一緒にいるはずだったのに、一緒に卒業するはずだったのに、晶は予定よりも早くいなくなってしまう。

少女たちの絆と友情の物語。

「たとえ遠くに離れても、大丈夫 - -」

「カaramelナツタルト……仲直りしましょう、だっけ」

そう、と隣で高橋妃穂が小さくうなずく。尾崎晶は別のを指して続けた。

「チョコムース。あなたが好きです」

「当たり前よ。……で、結局どれ食べるの？」

「いや、コーヒーだけで。お菓子はいささか食い飽きましたから」
「席、とつてますね」

おしゃべりする二人の後ろを抜けて、茨木貴子がいっているテーブルに向かう。

聖葉女子教育学園の敷地内にはオープンカフェがある。その一席に晶たち3人は腰を降ろした。やがて注文したものが運ばれてくる。ブラックコーヒーを飲んでいるのは高等部2年の尾崎晶だ。制服のシャツの袖を肘までまくりあげて、日焼けした腕を見せている。快活そうな少女だった。

「ローズティーと、シフォンケーキのお客さま」

「はい」

軽く手をあげて合図したのは同じく高等部2年の高橋妃穂だ。

柔らかそうな茶色の髪の長く伸ばして、結わずにそのまま垂らしている。小さな白いあごと大きな瞳がアンティークドールを連想させる美少女であるが、凜と伸ばした背筋からは意志の強さも感じさせる。

「妃穂さん、髪結いでしょうか。風出てきましたね」

自分の前に置かれたハーブティーよりも、妃穂の髪のほうがずっと大事だというように言ったのは茨木貴子。

洒落っ気のない銀縁眼鏡をかけていて、決して派手な容貌ではない肩までの黒髪は同色のヘアバンドでまとめており、理知的な額をすつきりと見せている。これも同じく高等部2年。

3人は聖葉高等部の同級生でもあり、寮に帰ればルームメイトでもある。

妃穂は風を読むように空を見上げたが、ちょうどそのとき強い風が吹いて彼女の髪を大きく散らした。髪を手で押さえて、妃穂は目を細める。

「そうね、結ってくれる？ 茨木」

そのことばが終わるか終わらないかのうちに、茨木はもう立ち上がっている。

櫛と髪ゴムを手にして妃穂の後ろへまわるのを、晶は黙って見ていた。茨木がなくなれとなく妃穂の世話をやくのは、いつものことなのだ。

黙って髪を編ませている妃穂を見ながら、晶は口をひらいた。

「妃穂だって人気あるのになあ」

「え、なんの話？」

「もちろんお菓子の数の話。どうして妃穂はそれほどでもないのに、あたしのとこにばかり集中すんだらうって話」

気持ちは嬉しいけど、と晶はため息をついた。

「それだけ親しまれているということよ。いいじゃない」

「まあ、女の園で嫌われるよりは好かれた方がいいに決まってるけど……。聖葉って、とかくお菓子を贈り合うよね。お菓子で気持ちを伝え合うよね。謝罪は『アイス』、愛の告白は『チョコ』、仲直

りは『カaramel』、感謝やお礼は『ビスケット』……」

指折り数えて考えながら晶は言った。

妃穂と茨木は初等部から聖葉の寮暮らしであるが、晶は高等部からの編入生なのだ。晶は続ける。

「確かに気持ちは嬉しいけどさ。来る日も来る日もチョコとビスケットチョコとビスケット。飽きるよ」

「まあ、あなたはモテるわよ女子校で。……というか、うちで」

晶は心底わからんという顔をした。

「なんでって……」

なぜわからないのかそっちの方がわからない、という顔を妃穂はする。後ろの茨木が手を動かしながら助け舟を出した。

「聖葉にはいないタイプですからね、尾崎さんは」

「珍しいからモテてるってことかい。珍獣扱いかい」

「野性味たつぷりというか、生命力に満ち溢れているというか、自由闊達というか」

「待て、珍獣は否定してくれないのか、茨木」

ふたりのやりとりを、妃穂はくすくす肩を揺らしながら聞いている。そうこうしている間にも茨木の手は器用に動いて、妃穂の髪の毛の生え際に細く編んだ三つ編みを巻きつけている。

ふと、膝の上に銀杏の葉が一枚落ちたのに気づいて妃穂はそれを摘みあげた。それを目の高さに持ち上げてくるくと回しながら言う。

「花や小物でなしに、お菓子で気持ちを伝えるというのはいい方法なのよ。特にうちみたいに、女ばかり何百人も集まって共同生活している全寮制の学校ではね。ことばをそのまま伝えるよりも、時にはずっといいの」

まあわかる気はすると晶は言った。テーブルに肘をついてコーヒーストを口に運んで。

「あたしも聖葉に来てそろそろ2年目になるからね。確かに来た当初は相当面食らったけど、今はだいぶわかってきたつもりだよ。たださあ、量が問題なんだよねえ」

だからそれは、それだけ慕われてるってことよ。と妃穂がなだめるように言った。晶は続ける。

「謝罪のときのアイスを贈るっていうのは理にかなってるなと思うよ。ものがアイスだけに贈る方も贈られた方もその辺に放置しておくわけにいかないしね。喧嘩をできるだけ長引かせないためのいいやり方だと思う。たとえそのアイス1個で問題のすべてが解決するわけじゃないにしても、『謝った』『謝罪の気持ちを受け取った』という形が成立すれば、それが解決への取っ掛けになるじゃないだから冷菓の場合はわかるんだよ。ただね、ちよつとなにか親切にただけですぐに『感謝』のビスケットとか『告白』のチョコとか贈るの、あれどうにかならんかなあ。あたしはひとりしかいなくて胃袋の容量にも限界があるんだけど」

そう言う晶に妃穂は苦笑して、だがすぐ真顔になって言った。

「うちみたいな全寮制の女子校で、そのほとんどが持ち上がりで、全員が家族みたいに親密……そんなところで『感謝・謝罪』をこまめにする習慣がないとどうなるか。うやむやになってしまふのよね。感謝の気持ちも、謝罪の気持ちも。うやむやになるとどうなるか」「どうなるの?」

「言わなくてもこのくらい通じているだろう、わかってもらえているだろうという気持ちが出てきてしまうわけ。でもね、それって甘えなのよね」

3人の横を通り過ぎる後輩たちが、ごきげんよう、と言いながら会釈していく。ごきげんよう。妃穂は笑顔で返す。晶は軽く片手をあ

げて、ようと返した。茨木は落ち着いた笑みをのぞかせただけ。後輩たちを見送ってから、妃穂は続けた。

「聖葉の生徒は、裕福な家の子女が多いわ。でもね、いくら同じ年頃で、同じような家庭環境で育った女の子同士だとしても、無理なのよね。なにも言わずして自分の気持ちをわかってもらおうだなんて」

「そりゃそうだ」

晶が賛同する。

「みんな、わかってはいるのよ。いくら毎日顔をあわせていて、一緒に暮らしていたとしても違う人間なんだって。頭ではわかってる。でもね、わかっていても失敗しちゃうってこと、あるでしょう」
あるね。また晶がうなずく。

「喧嘩のときなんて特にそうよね。そこまでするつもりはなかったのに失敗した、やりすぎた、言い過ぎた。自分でもしまったなと思っっているのに相手はすっかり態度を硬化させてしまっていて、謝ろうにも取り付く島もない。そんなとき、形式化された仲直りマニュアルとそのためのアイテムがあるというのはすごくいいのよね。本格的な喧嘩に発展して、お互いスタスタになる手前で食い止められるから」

「その点で、聖葉の『お菓子を贈る』というのは大変よくできたシステムだと思います」

妃穂の髪を結び終わった茨木がそう言っ、椅子に戻った。すっかりぬるくなったハーブティに口をつける。

そのとき、校内放送がかかった。

『高等部2年B組、尾崎晶さん。高等部2年B組、尾崎晶さん。連絡事項がありますので至急職員室まで来てください』
3人は揃って顔をあげた。

『繰り返します。高等部2年B組、尾崎晶さん。連絡事項がありますので、至急職員室まで……』

聖葉の敷地はたいそう広く、しかもその大半は緑地や森林である。というより、山の一角を切り崩して全寮制の女子校をつくったというのが正しい。さすがに短い休み時間の間にあまり遠くまで歩く生徒はいないのだが、放課後になるとこうして妃穂たちのようにオープンカフェまで出向いてお茶を楽しむ生徒も多い。だからスピーカーは敷地内のいたるところに据え付けられている。今、そのスピーカーから聞こえる声は学年主任の女教師のものだった。

「どうしたの」

「どうかしたんですか」

「晶あなた、なにかしたの」

「なにをしたんですか」

妃穂と茨木がかわるがわるに言うのを聞いて、晶は苦笑して手を横に振った。

「なんにもしてないって。人聞き悪いなあ。それにあれでしょ、今、連絡事項って言ったでしょ。ああいう言い方するときは叱られる話じゃないはずだよ」

とにかく行ってくる。晶は言って、急いでブラックコーヒーを飲み干すと席を立った。

交換留学生に立候補するつもりはないですか、というのが呼び出しの用件だった。

やはり叱責ではなかったことに、晶は胸をなでおろす。なでおろすということは今までそれだけ数多く叱られるようなことをしてきたということなのであるが、学年主任は申し込み書類を一式晶に差し出して、微笑みながら言った。

「行くつもりがあるなら、学校としては喜んで推薦するつもりです。ですから、よく考えて決めてください。決まれば出発は学年末になります。尾崎さんは語学の成績もいいし、外交的な性格ですから、いいと思いますよ。……どうですか？」

「はあ……」

「尾崎さん？」

晶がいかにも気乗りしない様子で返事をしたので、女教師は少し首をかしげた。意外そうに言う。

「気が進みませんか？」

「あ、いえ。決してそんなことは」

晶はあわてて首を横にふった。留学の話を聞いて一瞬ためらってしまったことに、自分でも驚いたのだった。

今までの自分なら、嬉しいはずの話であった。

今いる場所を離れる寂しさよりも、新しい世界、見知らぬ街、これから出会う人々への期待のほうが大きくて、ふたつ返事で飛びついたことだろう。

旅立ちはいつも、新しい映画のオープニングを見ているような気分にさせられる。それは晶にとって嬉しい出来事だった。

今は亡き晶の父は画家で、放浪癖のある人だった。

物心ついたときに母は既におらず、父とふたり家族だった晶は、父にくつついて世界各地を旅してまわっていたものだ。

父が死ぬまでの15年間、晶の人生は出会いと別れの連続だった。

父は、その土地で充分絵を描いたと思うと、その日の夜にはもう荷造りをはじめているような人だったからだ。

もつとずっと小さいころ、子どもころは泣いて駄々をこねた覚えがある。

その土地でできた友人たちと離れるのが嫌だといって晶が泣いてもわめいても、父は動じなかった。小さな晶を荷物のようにひょいと肩に担ぎ上げて、ぎゃあぎゃあ泣くのをそのままにその土地を離れたものだ。

そんなことを繰り返すうちに、晶は少しずつ現実と折り合いをつける術を身につけた。

泣いてもわめいてもそこにとどまることができないのなら、できた絆を絶やさない努力をしよう。

そういうふうに向転換したのだった。

今までの土地や友人と別れることはそれを失うことだと思うのではなくて、旅することに自分の世界は広がってゆき、友人も思い出も経験も増えるのだと考えること。

幼いながらも懸命に考えた末、晶はそうやって自分を納得させるようになった。そしてそれは今も変わっていない。

今はもう、今までの経験から、別れがすべてを終わりにするものではなく、また悲しいだけのものでもないと思っている。

それなのに、今自分はこんなに動揺していると思いながら晶は言った。

「気が進まないということではないです。急なことだったので動揺してしまっ」

学年主任が安心した表情でうなずくを見ながら、更に言う。

「お返事はいつまでにすればよろしいでしょうか」

「そうですね……今週中に」

女教師は卓上カレンダーを見ながら答える。

「保護者の方と相談を……あ、尾崎さんは御家族は」

言いさして、途中で晶の両親がいけないことに気づいた彼女は口ごもったが、晶は気にしなかった。あくまで朗らかに言う。

「はい、保護者代理人と相談して決めさせていただきます」

それじゃ、と深く一礼すると晶は職員室をあとにした。

晶はその足でオープンカフェではなく、まっすぐ寮の自室に帰った。妃穂も茨木もそちらへ戻っている筈と思ったからだ。

聖葉は初等部から高等部まである全寮制の女子校である。

基本的に部屋は三人部屋で、等部ごとに寮の建物はわかれている。

妃穂たちの住む建物は芙蓉寮といい、その四階に部屋はあった。

「おかえり」

思ったとおり、二人は部屋にいた。晶はただいまと言って自分の机に申し込み書類を投げ置いてから、制服のボタンをはずしはじめる。ひざ掛けを編んでいた妃穂が編み棒を置いてたずねた。

「お話、なんだったの」

「留学だって」

ベージューのジャケットを脱いでハンガーにかけながら言う晶に、妃穂は息をのんで大きな瞳を見開いた。

そのまま晶の背中を見つめて固まってしまった妃穂を見て、茨木が助け舟を出すように口を挟む。

「で、行くんですか？」

「いやあ、保留にしてきた。返事はすぐでなくてもいいって言うからさ」

ブラウスのボタンをはずしながら言う晶の台詞で、妃穂はやっと金縛りがとけたというようにゆっくり吐息を漏らした。一拍おいてか

ら口にした言葉はかすれてもおらず、震えてもいない。まったく普段どおりの妃穂のものだった。

「何故保留にしたの？ 迷っているの？」

だが晶はあっけないくらいずばりと、妃穂の動揺の核心を突く。

「あたしがいなくなったらあんたが寂しいと思って」

「……まあ」

妃穂はゆっくりまばたきしていたが、やがて手の甲をやりわりと口元に当ててほほと笑った。

「笑ったね？」

シャツを脱いで上はブラ一枚、下は制服のスカートという姿になった晶が勢いよく振り向いて、妃穂に向かってびしりと指を突きつける。

「あんたが『あら』とか『まあ』とか当たりさわりのない返事をしたあとで、そうやって時間稼ぎみたいに笑うときってというのはね。」

なにかが図星だった時なんだよ」

茨木が吹き出した。妃穂ににらまれてあわてて向こうをむく。時間割を指でなぞって明日の時間割を確認しているふり。

「しかもそれを認めたくないときなんだよ、そうやって笑ってごまかすときってというのは」

「ごまかすために笑っているわけじゃありません！」

「そう。で、言い当てられると怒る」

妃穂は一瞬言い返そうとして息を吸い込んだ。

なにか言おうと口をあけたが結局言葉は出てこなかった。

茨木は背中を向けて時間割を眺めているふりをしているが、その肩は小刻みに震えている。妃穂はしばらく口をパクパクさせていたが、やがて眉をひそめて聞き返した。

「わたくしって、そんなにわかりやすい？」

晶が即答する。

「相当スケルトン」

「茨木！ わたくし相当スケルトン?!」

「……ノーマコメントです」

茨木は背中を向けたままで答えた。晶がさらに追い討ちをかけるように言う。

「茨木がね、充分考える時間があったくせにはつきりものを答えな
いときつていうのはね、言いづらい答えが出たからだよ」

茨木は我慢できなくなったらしくて低い笑い声をもらしている。妃
穂はしばらく晶と茨木を交互ににらんでいたが、軽く咳払いして仕
切りなおした。

「……で？ そうなの？」

「なにが」

「わたくしが寂しがったら留学しないつもりでいるの？」

晶は部屋着に袖を通すと、あごの下まで一気にファスナーを引き上
げて言った。

「試しに言ってみたらは、寂しくなるから行かないでって」

「誰が」

即答する返事は短い。

「意地っ張り。それから」

晶は呆れたように妃穂を見下ろすと、三段ベッドの一番下に腰掛け
た。そこは妃穂のベッドであるが、そんなことはお構いなしで足を
組んでぶらぶらさせる。

「自分で言うのもなんだけど、あんた、あたしと仲良くなってから
ちよっとガラが悪くなっただんじゃないの」

晶はベッドスペースの都合上、やや前傾姿勢をとりながら親指で茨
木の背中を指した。

「ホラ茨木もうなずいてる」

「茨木！」

叱責されて茨木は主に向き直った。椅子に横座りして言う。

「悪いとは言っていないせん。出るべきところへ出た時にちゃんとし
ていてくれたらいいんです」

「今はちゃんとしていなくて悪かったわね……」

妃穂が恨めしそうに上目遣いで言うのを、茨木はさりと流した。

「学校では、いいんです」

茨木は銀縁メガネ越しにやさしく微笑んだ。妃穂はほっと肩の力が抜けたように微笑する。

「まあ、そうね。ここでは少しくらい羽を伸ばしても構わないわよね。わたくしたちにとつて、聖葉は家ですもの。ね、茨木」

「そうですね。私もむしろ実家よりこのほうが落ち着きます」

「嘘よ晶。この人どこへ行っても変わらないのよ。このまんま」
「だろうねえ、と晶があいづちをうつ。」

「せいぜい高橋の本家に来たときくらいかしらね、もう少し改まるの」

妃穂の実家はもうかれこれ600年も続く旧家だ。

歴史ある名家だというだけでなく、たいそうな資産をも併せ持ち、この聖葉女子教育学園も元はいえ高橋家が創設したものだといふから、妃穂がここで特別扱いされているのも頷ける。

当時の当主は自家の子女を安全かつ優雅に教育する場所を探していたのだが、その眼鏡にかなう学校はなかった。それで自らつくることにしたのだと言う。高橋妃穂はその創設者の直系の子孫にあたる。

高橋本家の長女であり、あとを継ぐことを義務付けられている妃穂が聖葉にいるのはある意味当然なのだが、妃穂とその実父との間は決してうまくいっているというわけではなかった。

父が一人娘を疎んじて聖葉に押し込めたというのは学園内ではほぼ暗黙の了解事項で、それが知れ渡っていながらかつて取り巻きが大勢いたのは、妃穂の父が政財界に多大な影響を持っていたこと、その関連企業重役の子女が聖葉内には多かったこと、そして親子の不仲は別にしても妃穂の機嫌を損ねることで、自分の学園内での居心地だけでなく、自らの父の立場までも悪くすることにつながると、生徒のそれぞれが考えたからだった。

彼女たちは争って高橋妃穂の機嫌をとり、女王さまでもあるかのように扱い、妃穂はうわべの華やかさとは裏腹に孤独になった。

世慣れた振る舞いだけがなめらかに得意になり、本心を見せられるものは茨木をおいていなかった。

そこへ、尾崎晶が編入してきたのである。

晶はそのとき既に庇護してくれる保護者もなく、高橋家ともその関連企業とも関わりがなかったので、聖葉内での派閥争いからは自由でいられた。

当時茨木とふたり部屋だった妃穂の部屋に晶を入れたのは、晶に対する学校側の配慮だった。晶が早く学園になじめるようにとの。

代理人を間に挟んどはいえ、父の遺産を自分で管理し自分の人生を自分で決めている晶に、妃穂は自分が将来こうありたいと思う姿を見た。

また晶も、高橋家のひとり娘という重責に押し潰されることなく、自分とはまったく異質な形の覚悟でもって人生に臨んでいる妃穂に、対等ではあるが尊敬するという態度で接した。

話せば話すほど二人が惹かれあつていくのを、茨木も止めなかった。

晶がベッドに腰掛けたままで思い出すような目になった。

「妃穂の実家、すごかったよねえ。お正月行ったとき、正直びっくりした。格式高いってああいうことを言うんだね」

「ただっ広いだけ。そして古いだけ」

妃穂のコメントはあくまでさばさばしている。

「わたくしも茨木も、初等部からここですもの。お互い実家に帰ってもなんだか家って感じがしないのよ」

「茨木といえば。妃穂の実家ですごかった」

私ですか、と茨木が無言で首を傾げる。なにがですか？

「侍女って感じだった。しかも隙のない」

「おや、そうでしたか」

どこか嬉しそうにそう答える茨木に、妃穂が肩をすくめた。

「いいの。この人のこれはもう直らないの」

「私の美学とでも申しますか」

言われてなおさら嬉しそうに茨木は言った。

「そんな時代じゃないし、そこまでしないでいいと言ってるのに」

「好きでやってるんですよ」

「おかげで高橋本家での受けは非常に良いのだけでも」

だから茨木と一緒にだと私も実家で少しは気が楽なのだけど、と妃穂はため息混じりにつぶやいた。

「茨木は父のお気に入りでもあるし」

と、茨木は少し眉をしかめて静かにたしなめた。

「そういう言い方はよして下さい妃穂さん。私はあなたの父上に仕えているのじゃなくて、あなたに仕えているつもりでいるんですから」

「茨木って、小さい頃から今とおんなじ？」

晶が聞くと妃穂がうなずいた。そう、昔からおんなじ。

茨木がやわらかく笑って言う。

「代々高橋に使える家系でもありますし、DNAに組み込まれているのかもしれない」

「わたくしに忠誠を誓っているのよね」

「そうですよ」

「一生？」

晶が聞くと、茨木は当然という顔でうなずいた。
「一生です」

それからの数日、晶は留学の件で迷っているようだった。

そしてそれについて、妃穂も茨木も意見を挟むようなことはしなかった。行くにせよやめるにせよ、晶がなるべく自分の考えだけで決断すべきことだと思ったからである。

ともかく晶は悩んだ末に結論を出した。

行く、というのがその答えだった。

妃穂も茨木もそれに異議を唱えることはなく、応援するから行っくらっしゃいと笑顔で返した。

「だいたいわたくしが寂しがるからどうこうなんて、考えなくていいのよ。離れていても友達に変わらないわ。そうでしょ」

別れまでのカウントダウンはきわめてなごやかなに進んだ。

メールもあるしお互いパソコン持つてるから無調通話もできるし、問題なのは時差だけね。あなたの向こうでのやんちゃ話を聞かせてもらうの楽しみにしてるわと妃穂は笑う。

「あなたが聖葉に来てから2年。たったの2年なのにもう10年も一緒にいるような気がする」

と妃穂は窓の向こうを見ながら言った。

芙蓉寮の自室でのこと。

「ここはいろんな人がいるけど、あなたくらい印象の強い人ってい

ないわ」

「そう？ …… かもね」

この二年間を思い返してみても、晶は悪戯がばれたやんちゃ坊主のような気分で視線をそらした。

当時は自分なりにごく当たり前前にふるまっていたつもりでいたが、今思うと確かに自分はこの静かな学園に波紋を引き起こしたと思ったからだった。

「あなたのことを忘れられる人なんていないわ。わたくしに限らず聖葉生なら誰でもよ。絶対」

妃穂は窓から見えるもみの木に目を向けていたが、そのまなざしはこれまでの出来事を思い出しているらしく、やさしかった。

妃穂は肩越しに振り向いて言う。

「だから安心して思う存分一年間行ってらっしゃい。そうよ、たったの一年じゃないの。大げさに考えることなんてないわ。そうですよ」

そう言った妃穂がその笑顔を崩したのは、2月の末。

晶の出発が翌日に迫った夜のことだった。

その夜、晶は寮の自室で翌日の最終チェックをしていた。

私物はもうほとんど向こうに送ってしまったので、部屋は心なしかがらんとして見える。

「さてと、忘れもないな」

手荷物のバッグをポンと叩いていう晶を、妃穂が半眼になって見下ろす。風呂上がりの半がわきの髪を肩に散らして。

「あなたのことですもの、絶対なにか忘れていると思うわ」

茨木は椅子に腰掛けてそのやりとりを見ていた。

「財布と携帯と飛行機のチケット持ったの？」

「そこまで抜けてないよ」

「パスポート持った？」

「持ってるよー」

「見せてもらんなさい？」

えー？とふくれつつらをしてホラここにあるでしょ、とバッグの中に手を入れた晶だったが、やがておかしいなという顔になった。

「あれ、えっと」

青ざめてゴソゴソ荷物の中を探り出す晶に茨木が口を挟む。

「ダンボールに詰めて送っちゃったんじゃないんですか。やりかねませんよあなたの場合」

「ないって！」

晶がいくぶん焦りながら言い返したところに、妃穂が黒いものをパタパタ振った。

「あーっそれどこに」

飛びついてくる晶にすんなりパスポートを渡してやりながら、妃穂は言った。

「調理室の流し台の上に置いてありました」

「あーっ、ありがとーっ。でもなんで調理室？」

「知りません」

妃穂は呆れ顔でため息をついた。

「これがないと行けませんよ」

だよねーっ！と晶は大事そうにそれを鞆の内ポケットにしまった。

「ああ、ひやひやしたあ」

「こっちの台詞です。ほんとに……ほんとに手のかかるひと」

妃穂の目から涙がこぼれたのは、その時だった。

「……………あっ」

晶はもちろん目を丸くしていたが、一番驚いたのは当の妃穂だった。

「あの……ひ、すいさん」

「泣いてません！」

叩きつけるような言い方で妃穂は先手を打ったが、晶はげんな、心配そうな声で茨木に助けを求めた。

「……泣いてるよねえ？」

「私は、なにも見ていません」

茨木はしらじらしい顔で嘘をついた。

「私の目指すところは、有能な従者ですから」
そう言うて。

「あるじに不利なことはしっかり把握したうえで、見ないふりをするという方針です」

「見てるんじゃない」

「いや、この人たち！」

言うて勢いよく立ち上がったのは妃穂だった。

「ええーっあたしも含まれてんの？」

「当たり前です！」

不服そうに言った晶の横をすり抜けて、自分のベッドへもぐりこむ。

「わたくしはもう寝ます！」

その妃穂の長い髪が見えなくなる寸前、片手でひとつかみにした晶だった。妃穂の細い白い首がのけぞる。

「いつ」

「待ちなつて……それに髪乾かしなよ。風邪ひくでしょ」

「そう、いう、問題、では」

ベッドの柱に爪を立てて、今にもヒステリーを起こしそうな妃穂を見ながら茨木が淡々と言った。

「尾崎さん。その格好あれみたいです」

「なに？ どれ？」

「よその部族の洞穴に押し入って有無を言わず女を略奪する原人」
「茨木ってたとえ話に難がある。ラプンツェルって言うかと思った」
「ああ、そういうたとえ方もありますね」

なるほどと茨木が膝をつつたと同時に、妃穂が勢いよく自分の髪の毛を奪い返した。

そして一息にベッドへ身を滑り込ませると、左右から勢いよくカーテンを閉めた。隙間なく、ぴっちり。

「ねえ」

すぐさま晶がそれをあける。

「あけない！」

間をおかずまた閉められる。

「だって話あるもん」

そう言ってもう一度あけたカーテンを、妃穂は今度は無言で閉めた。

「いいからちよつとあけて」

あける。

「よくありません！」

閉める。

「話あるってば」

またあける。

「しつこいわよ晶！」

「しつこくしてんだもん！ あんたの意地っ張りに対抗しようとするとか大変なんだよ」

「あのね、あなたね……」

妃穂は言いかけて口を閉ざした。

冷静さを取り戻そうとするように、片手を自分の胸へあてると妃穂はゆっくり深呼吸する。吸って、吐いて。吸って、吐いて。

それからおもむろに言う。

「……少しわたくしのこと、ひとりにしておいていただけない？」

「ダメ」

即答されて、妃穂はいやそうな顔をした。

その顔のまま茨木のほうを向いて言う。

「この人をどうにかして頂戴。わたくしの手には負えないわ」

茨木は、とってつけたような真面目くさった顔で言った。

「有能な従者を目指す身としては如何とも迷うところです、妃穂さん。ひらたく言うと静観です」

「あんたをひとりで泣かせておきたくないんだもん」

晶が妃穂をまっすぐ見て、その心に斬り込むようにはつきり言った。
「どうせ泣くならあたしの胸で泣いたらいいよホラ。……あつ、また閉める。一体あたしのなにが気に食わないのさーっ」

晶はもう一回強引にカーテンをあけようとしたが、今度は中から妃穂が布地を引っ張っているのひらかなった。

中と外とで布地の引っ張り合いになるのを見て茨木が言う。

「カーテン破かないでくださいね、尾崎さん」

「妃穂に言って？」

「破かないでくださいね、妃穂さん」

あなたどっちの味方なのよ！と妃穂が中から大声を出す。

「だって泣くんだもん！」

妃穂の大声に対抗するように晶が断言する。

「泣いてる子には、まず抱っこでしょ」

「わたくし子供じゃありませんからお気遣い御無用です！」

「いやあ？ あんたは子どもだよ結構」

カーテンの中で、妃穂が動きを止める。

「子どもでしょ。大人になっても時には誰かに甘えていいんだってこともわかってない。あたしたちは友だちなんだよ。友だち同士ならたまには思い切り駄々をこねても無理を言っても、それは悪いことじゃないんだってそんなこともわかってない、友だちにならわがままも無理難題も、言われたら嬉しいときもあるんだってこともわかってない、子ども」

カーテンの中で、妃穂は息を詰めた。小さくうつむく。

晶は茨木の方をむいて言った。

「こういう子が閉じた扉は無理やり開いちゃっていいんだよ」

いいんですか、無理やりですか。

そう茨木が言って、参考になりますと小さく頭を下げた。晶もうなずく。

「いいことになってるの。どんな手を使ってもいいって、決まってる」

るの」

騙してでもね、といって晶は足で左端のカーテンをすくいあげる。寝巻きを着た妃穂のうすい肩がびくつと震え、きゃつと小さな声があがった。

「ということだからあきらめて出てきな。こういう時のあたしには叶わないと思うよ？ しつこいし、粘り強いし。あれそれと一緒に」

「もういやっ、あなた」

言いながら妃穂は手を離してベッドから飛び出た。

「わたくしのこと、少しもほつといてくれない！」

「大事なことからでしょ。ほつとくわけないでしょ」

その次のひとはよく考えて言ったのではなくて、ベッドから飛び出した拍子に喉につかえていたことばまで転がり落ちてしまった、そんな感じのひとことだった。

「だって行っちゃう人じゃないの」

「はアッ?!」

なんだってエ、と晶の顔が歪むのを見て、妃穂はしまったという顔で口をつぐんだ。

「今なんてった？ 妃穂」

妃穂は視線を泳がせている。

「もう一回言ってごらん」

普段あけっぴろげな晶が抑え気味に言う声はかえって凄みがある。

「この3カ月間ずっとそう思ってたのかどうか、ちゃんと言っごらん。どうせ行っちゃう人間相手になにを言っても仕方がないってあなたはそう思ってたの？」

「今の嘘、嘘です」

晶はまばたきもせずに妃穂を見つめ続ける。

「妃穂、あたしはそういうのは嫌いだ。いつも言ってるよね。たとえ摩擦が起きたとしても、意見が違ったとしても本当のことを言ってる。他人はどうでもあんたとあたしの間ではそうしてって」

「ですから今のは嘘ですから」

「そんな言い逃れは通用しないよ」

「じゃあ今のなし！」

「妃穂！」

晶が叱りつけると同時に妃穂は身をひるがえして駆け出した。部屋の外へ。

白い寝巻きの裾をつかもうと伸ばした晶の手が空振りする。

晶よりも先に茨木が反応した。間髪入れずにそのあとを追う。晶もすぐにそれを追った。

寮の各階にはそれぞれ調理室がある。

小さなテレビと椅子もあり、サロンの役割もする場所だがそろそろ就寝時間とあって誰もいない。電気も消えている。

その調理室に妃穂は飛び込んだ。とっさの行動だった。

勢いよく扉を閉める直前、そこに肩をぶつけるようにして茨木が滑り込む。

晶は一瞬遅れて扉に手をつく。

直後にかちつとなかから鍵のかかる音。ちつと、晶は舌打ちをもらした。

外では晶が扉を叩いている。ダンダンダンダン。ドカツ。蹴つてもいる。

大きく肩を上下させて息を整える妃穂に、茨木が言った。

「……こんな所にこもってしまつて」

その声は非難がましい。

「言わないでちょうだい」

「どうするつもりなんです」

「わ、わたくしも少し失敗したかしらとは思っているわ」

外では尚も晶が扉を叩いている。茨木は大きなため息をついた。

「ため息つかないで！ほんとにあなたってわたくしを甘やかさない人よね」

「そうですか？ 甘やかしまくっていますよ」

「どこがよ」

「こうしておそばにいるところがです」

淡々と言うのを聞いて、妃穂は口をつぐんだ。

「甘いことばをかけることだけがやさしさではないですから」

「……それはわかつているわ」

「だったらどうして尾崎さんが怒っているのかもわかりますね」

わかる、と妃穂はうつむいて唇を噛んだ。こらあ妃穂出てきなさい、と外では晶がめげずに扉を叩いている。

「わたくしが、あの子に本音を見せなかったからだわ。……摩擦を避けて、ひとりで気持ちを押さえ込んだから」

「わかつているならなんとかしてください。私は自分のベッドで眠りたく思います」

ううつと妃穂は苦々しいなり声をあげた。

どうしたんですか、大丈夫ですか。尾崎さんそこでなにしてるんですか。各部屋のドアがあいて人が集まってくる気配がする。妃穂が

焦った顔になる。

「いやだ茨木、みんな来ちゃった」

「そりや来ますよ。あれだけ大騒ぎすればね。そうでなくてもここ音が響くし。夜ですし」

妃穂！と晶が扉を叩きながら言う。

「あんだね、言いたいことがあるなら言えっっていつてるでしょう、そうやってひとりで抱え込むなって、いつも、いつも、いつも！」

「なんでもかんでも言えばいいというものではありません！」

妃穂も怒鳴り返した。

「リクエストしてるのに！」

「却下します！」

「このおッ」

更に声を張り上げた晶を、同級生たちが押しとどめた。しーっ尾崎さん、先生が来ちゃいます。静かにして。

妃穂が肩をすぼめてくしゃみをした。裸足の足を重ねてこすり合わせる。寒いですねと茨木が言った。夜の調理室。暖房が入っているはずもない。

「……出て行きづらいわ」

やっとその気になったかと微笑む気持ちは表に出さず、茨木は淡々と言った。自業自得です。

くっとな妃穂が奥歯を噛みしめる。

「で？ どうするんです」

「待ってちょうだい、今考えているわ。……ああもうどうしてこんなところに逃げ込んだんじゃったのかしら」

あなたの悪い癖のせいです。茨木はつけつけと言った。

「追い込まれるとつい逃げにまわるのは悪い癖だと思います。踏みとどまる習慣をつけていたかないと」

「どなってごめんね」

晶は扉に口を寄せるようにして、静かに言った。

「さつきは確かにあたしもきつかった。ごめん、妃穂」
返事はない。聞こえてはいるはずだが。

「喧嘩はしたくない。ここあけて」

扉に耳を当てる。かすかに中で人が動きまわる気配。中でなにや
てるんだ？と首をかしげたちょうどその時、鼻先に甘い匂いが漂っ
てきた。カaramelだ。

「……あいつは何をやってた、こんな時に」

晶は扉から体をはなして不穏な低い声を出す。

「カaramelの匂い」

誰かが言う。

「仲直りのお菓子ですね」

「そんな悠長な」

口で言やいいんだ口で、と大声を出しかけた晶の口を、同級生数人
があわてて押さえた。

「それは言っちゃダメです」

「わざわざ水をさすようなこと」

あのねえと晶が苦い顔をしたが、彼女たちは揃って真剣な顔で首を
ふった。

「それはデリカシーないです尾崎さん」

「そうです、高橋さんがせっかく」

ふーと晶はため息をついた。納得はしていない。そんな表情ではあ
るがひとまず大人しくなった。同級生のひとりが言う。

「でも高橋さんは、あなたがあの人のために留学を取りやめたりしていたら、とても怒ったと思いますよ。……そんなこと、あなたはしないでしょうけど」

「うん、しないね。あたしは妃穂のために自分の気持ちを殺すことはしない。自分のやりたいことをやりながら、そのままの自分で妃穂と付き合っていくし、妃穂を大切にしていく」

「だから、高橋さんにも自分を殺して欲しくないんですか？」

「そうそれ！」

晶は手をうつて同級生を指差した。

「あいつはたまにあたしのことを、まぶしいような目で見ることもある。自分には手の届かない憧れの象徴をあたしの中に見るみたい。そんなふうに見られると、傷ついちゃうんだよ」

「尾崎さん……」

「そういう妃穂を見ると、こう言われてるように思える。自分は一生自由になれないから、かわりにあなたがわたくしの分まで自由に生きてちょうだいって。わたくしはそれを見て満足しているからって。そうじゃないんだよって、言いたい。住む場所が離れても立場が違って、あたしたちはつながってるんだって、言いたい」

晶はそう言つと、ちよつと息を吐いて大きく前髪をかきあげた。それから勢いよく冷たい廊下に座り込んだ。あぐらをかいて、調理室の扉に背中をくつつける。

ごつんと後頭部を扉にもたれさせて、天井を仰いだ。軽く目を閉じて続ける。

「あたしと妃穂とは一緒に生きるんだよ。あたしだけ自由奔放であいつはずつと籠の鳥じゃないんだよ。閉じ込められたラプンツェルじゃないんだよ。自由には、一緒になるんだよ」

一体どれほど待っただろう。

実際それほど時間はかかっていなかったが、明かりの消えたうす寒い廊下でただじっと待っているのは、実際よりもひどく長く感じられた。

ポトン、頭になにか落ちてきた感触で晶は我にかえる。見ると上窓から妃穂が白い指先だけを覗かせて鮮やかな色のなにかを落としていた。

黙って拾い上げる。

紫がかったピンクの包み紙、その中身はお菓子だった。

グラノラトフィーバー。カaramelがまだ熱いうちに市販のグラノラを混ぜて作るお菓子。カaramelの匂いはこれを作ってたからか、と晶は眉間にしわを寄せて包みを開いた。

ワックスペーパーに妃穂の字でなにか書いてあるのを確認して、晶はまた一段と低くかすれた声を出した。

「……おいこら」

こんなことする前にまずすることあるだろ、開けるここを。とまた大声を出しかける晶を、再び同級生たちが牽制した。

「しーっ、尾崎さん！」

「これって全部食べてからでないと返事したらダメなんだっけ？」

「……っておい妃穂、全部でいくつ作ったんだっ」

6本よ、と中から返事が聞こえてきて晶は嫌な顔をした。

「全部食べきれると思ってんの？ 嫌がらせ？」

「あなたならいけますから」

という声はもう落ち着き払っている。

「……たく」

晶はグラノラトフィーバーを一本頬張りながら思った。なるほど、製菓というのはこういう側面もあるわけか。少なくとも、ヒスを起こしては作れない。

「おいこれあつたかいんですが。というか、熱い」
「出来たてなんです」

中から茨木が笑い声で返すのを聞いて、晶は思った。

口で言えばすむところをわざわざお菓子で伝えるなんて、正直まどろっこしいと思っていたけどこうしてみるとそうでもないな。

事実、棘々していた心もムードも、今はもうどこかへいつてしまっていた。

『応援してる』

『頑張つて』

『必ず帰ってきて』

『忘れたらだめよ』

『元気で帰ってきて』

『メールして、電話も』

やつのことで6本全部飲み下した晶は、ワックスペーパーを一枚一枚目の前に広げて読み上げる。

音読しない！と中から妃穂の怒ったような照れたような声。晶がたずねる。

「これで終わり？」

「どういうこと」

調理室の扉を挟んで顔を寄せ合うようにふたりは会話している。

「もうないの？ あとは？」

「おしまいです。なぜ？」

「え、おしまって、包み紙が？ 材料が？ 気持ちが？」

「喧嘩売ってるのあなた」

中から妃穂の不穏なかすれ声。

「だって足りないよ？」

「何がですか」

「ここまで書くのに、どうして好きって書いてくれないの？ あと『行かないで』とか。一番言いたいのはそのなんじゃないの？ どうしてそこを伝えてくれないかなあ」

「あなた、ねえ」

妃穂は腰くだけになって調理室の床に座り込んだ。

「ほんとに……いやもう、この人」

「あたしがいなくなるって実感すると不安で寂しくて、それを隠せなくなっちゃうくらい動揺しちゃうんでしょう。それって、隠さずにはいられないくらい強い気持ちで悲しがつてくれてるってことだよ、違うの？」

そうです、と小さな声で妃穂はつぶやいた。

だがそれは小さすぎて、扉の向こうまでは届かなかったようだった。晶が更に続ける。

「ねえどうして？ 本当に好きすぎて文字にもできないの？ それともわざわざ伝えるまでもないような軽い気持ちだから書かないの？」

「誰がそんなことを言いましたか！」

妃穂のヒステリーが爆発した。

「そこまで言わないとわからないんですかッ」

「あんた前になんてった？ 当然わかってくれてるだろうから言わなくていいなんていうのは油断で甘えだって言わなかった？」

「行かないでって言っても行くでしょ！」

「行くともさ」

「だったら言っても意味ないでしょ、あなたのことを困らせるだけでしょ！」

「そんなことないって！ 言つてよ」

「いやです、困らせるってわかつてるのに」

既にふたりのやり取りは怒鳴りあいになくなっていた。

「でも今言つたよね」

「たとえばなしです。言つたうちには含めません」

「うへー屁理屈」

「あなたにはこれくらい強引でいいんです」

「盛り上がつておいでのところ大変恐縮ですがみなさん」

その怒鳴りあいを中断させたのは寮監督の先生だった。

ふりむいた晶はげつという顔になる。扉の向こうの妃穂も同様。いつからそこに先生がいたのか、少しも気づかなかつた。

見回りにきた寮監督の初老の女教師は険しい顔をつくつて言った。

「就寝時間はどうに過ぎていますよ、みなさん。お部屋にお戻りなさい」

静かに諫める口調で言われて、全員、すみやかに撤収した。

翌日、妃穂と茨木は空港で晶を見送った。

なにこともなく別れを終えて、尾崎晶からの手紙に妃穂が気づいたのは寮に帰ってからだった。

白い封筒に白い便箋でインクの色は黒。そっけないくらいシンプル。なそれは晶のまっすぐな性格そのまま。

手紙は妃穂の枕の下にそつと忍び込ませてあつたので、彼女がそれに気づいたのは寝る寸前のことだった。

高橋妃穂さま。

最後ああ言ってくれて嬉しかった。

最後の最後で本音を見せてくれたあなたに敬意を表して、私もあなたに手紙を書きます。

（多分ずっとメールでのやりとりになっちゃうだろうから、手紙なんてこの一年で初めて最後かもしれないね）

はじめてあなたに会ったときのことをまだ覚えています。

綺麗だけど鼻持ちならない感じがするというのが正直な感想でした。

むっとする顔が目に見えるようです。

まあまあ。

ちゃんと最後は褒めてしめるから、まあ聞いて。

あたしが転校ばかりしてきたことは話したと思うけど、どこにも一人はいるんだよね、当時のあんたみたいな奴。我がままでプライド高い、女王さま気取りの。

あーわかってる。

だから、あとからちゃんと褒めるってば。

第一印象は最悪でした。ああまたこのタイプの女かと思った。

しかも同室だったしこれからが大変だなんて。

でも、第一印象が悪かったにもかかわらず、あなたのことがどうしても気になって気になって仕方なかった。なかなか言わないあなたの本音を引きずり出したかった。

どうしてなんだろう。

考えました。

あなたのことだけなぜ気になるのか。どこに魅力を感じているのか。少しずつ話をするうちにわかってきました。

今まで見てきた薄っぺらなお嬢さまたち、その高いプライドの割に自分の世界がどんなに狭いか知らない女の子たちとあなたは違った。

あなたは『高橋本家のひとり娘』であり『財閥の跡取り娘』という現実に潰されてはいませんでしたね。

私はそこにあなたのしぶとさや、一筋縄ではいかなさそうな強い個性を感じて仲良くなりたいたと思ったのでした。自分に通じる場所があると思ったのでした。

あなたの素の言葉を聞きたかった。

今回のことに限らず、あんなにしつこく本音を言え、気持ち隠すなど言い続けたのは、気づいていたでしょうか？あなたにだけです。あたしの17年間で一番嬉しかった言葉。

それはいつかあなたが言ってくれた『ずっとここにいたらいいわよ』でした。

これからはずっとここにいたらいいと言われて、あたしは故郷にやと帰ってきた、長かった旅はこれで終わった、そういう気持ちになったのでした。故郷なんて、持ったこともないくせに。

もちろん聖葉は、高校を卒業したら自動的に出て行かなければならない世界なのですが、その時あたしは思ったのでした。

故郷のように、いつでも出て行っていつでも帰ってこられる場所。

そんな場所を、あなたとの関係の中につくろうと。

あなたの心の中に、決して取り上げられることのない私のためだけの椅子があること。そしてそれは、お互いにそうであること。

そういうふうになりたかったのでした。

聖葉を卒業したから終わりになるのではなく、大人になるにつれて離れていくのでもなく、そのあととずっと濃密な時間を積み重ねていく。そういうふうになりたかった。

私の強引さに根負けしてくれてありがとう。おかげでこんなに仲良くなれましたね。

どんな形であってもぶつかりあって互いに摩擦を起こすことで、私たちの絆は深まるはずだと思った私の考えは見事に当たっていたわけです。

妃穂、私はあなたが大好きです。

留学を薦められてもしばらく本気で迷ってしまったくらいに。

一年間くらい離れていてもなにも変わらないと、わかっていてもそれでも離れたくないと思ってしまったくらいに。

それでも行つてきます。

そして帰つてきます。

あなたの友人として恥じない自分であり続けようと思つ氣持ちが、これから行く場所で私を堂々といさせてくれるでしょう。

一年たつたら戻ります。そのときまた会いましょう。

愛と友情と尊敬をこめて。

晶。

4頁（後書き）

読んでいただき有り難うございました。

「手紙」というお題が先にあつて、50枚程度の読みきり短編をと
いうリクエストで生まれたのがこの話。そのつもりで書いていまし
たが、50枚には入りきらず、また読み切りにもなりませんでした↑
ということでは、晶が聖葉に来たばかりの頃の話。

早逝した母の顔を知らない晶は、その母校である聖葉にどうしても
入りたい理由があつた。

50年以上ここにいる初老の女舎監のやさしく平等な厳しさと共に。
「先生のコーヒー」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1596i/>

グラノラトフィーバー

2010年10月10日02時26分発行